



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

夏の終わりを告げるツツクボウシが賑やかになってきた。辛いニュースの多い今年の夏だったが、そんな中、素敵な思い出ができた。「真鶴まちな一れ」だ。今まで幾度となく訪れている町だが、地図を片手に歩いた一日で、町の魅力、人の魅力、アートが町にある豊かさを満喫した「真鶴再発見の旅」をした気分になった。「地元」を知り尽くした若いプロデューサーたちの「地元愛」を支えるのは、行政も含む、一人でも多くの人に関心を持ち、話題にし、足を運び、楽しみ、発信することから始まるのだと思う。新しいチャレンジが次回につながることを心から応援したい。さあ、9月。『第8回小田原映画祭』が始まる。銅門野外上映会「天心」にも、ぜひ足を運んでいただきたい。



新九郎 9月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 9/4(木) 新九郎デッサン会	インド古典舞踊家・茶谷祐三子さんをモデルに迎えて 特別企画料金 2,000円
 9/6(土) 真夏のハワイアンライブ 18:15-20:30	長谷川マコト&スーパーウクレレバンド 料金 1000円(前売のみ)
 9/7(日) 13:30-15:30 古文書講座 問 0465-22-1366	「鎖国の禁断を破った老中の決断」講師：NHK 学園古文書講師。油井宏子 受講料 1500円
 9/10(水)~15(月) 第29回女流展	芸術の秋の開幕に相応しい女流実力派 13人の展覧会
 9/17(水)~22(月) 第62回水曜会洋画展	日本やヨーロッパの風景画、西相美術協会会員を中心にベテランが揃う
 9/24(水)~29(月) 第二金土デッサン会 会員展	生涯学習センターけやきでデッサンの勉強をする会。出品者 29人(裏面に紹介記事)

会期・展覧会名	会場
9/17(水)~22(月) 野口均作陶展	飛鳥画廊 0465-24-3790
9/4(木)~9/7(日) 北鎌倉蘇芳庵	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
9/10(水)~15(月) 夏目日出男個展	アオキ画廊 2F 0465-23-5624
9/25(水)~29(月) あーと彩の会	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
9/25(水)~29(月) 相原苑江水彩画展	アオキ画廊 2F 0465-23-5624
9/16(火)~28(日) 米澤寛子展 ぼくらのなかみ	すどう美術館 0465-30-2950
9/10(水)~15(月) 植松英夫陶芸展	お堀端画廊 0465-23-7819
9/24(水)~29(月) 第26回 小田楷水彩画展	お堀端画廊 0465-23-7819
9/30(火)~10/5(日) 公募 43rd 南足柄市美術展	南足柄市文化会館 2F 0465-73-5111
9/1(金)~29(月)水第4木休 月とはなす 横井山泰展	NARAYA CAFÉ GALLERY 0460-82-1259

第8回小田原映画祭オープニングイベント

小田原城銅門野外上映会 日時：2014年9月27日(土) 17:30開場/17:50開始
 復興支援映画 **天心** 上映 場所：小田原城銅門枡形(雨天の場合は三の丸小学校アリーナ)
 [入場料 1,000円] [前売チケット販売所] 伊勢治書店(本店・ダイナシティ店)、ダイナシティウエストチケットぴあ、ポタジェラ



東海道五十三次 13 掛川宿(掛川の代官屋敷) 5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



掛川の町は、16世紀末、山内一豊が掛川城に入城してから大きく発展した。町並み整備や社寺の振興など一豊が整えた町の下地は江戸時代にも引き継がれ、遠州地方の政治経

済・文化などあらゆる面で中心地として栄えた。

この町で、小田原に関係あるものとしては、二宮尊徳が唱えた報徳思想の普及・実践をめざして全国に生まれた報徳社の本社大日本報徳社がある。大講堂や図書館を有し、迎徳館は、皇室ご使用の霞ヶ関離宮別館を移したものだそう。スケッチした掛川の代官屋敷は城からはちょっと離れた畑の中に建っていた。

思うことなど 横井山 泰



新九郎の個展がはじまった。6月から仕上げた新作とface展の作品、絵本の原画あわせて60点以上あるのだが、すっきりとした空間に仕上がった。陶器のお面も良くできた。

アトリエは大変暑く連日40度あたりを指している。数字をみるとバカバカしくなるので温度計をはずした。夏になる前に取付け換気扇と扇風機がなければさらに暑かっただろう。愛犬はアトリエのソファでグッタリしている。散歩の途中、川に漬かるのが最近のお気に入りのようである。異常な暑さも悪いことばかりではない。空気の暑いアトリエの壁はさらに熱いのである。僕はキャンバスを壁に掛けて描くのだが、油絵具がヨーロッパ並みによく乾く。結構な厚塗りをして翌日に丁度よく乾くし、描写の絵具は着けた先から乾いて行く。壁をさわると温泉の湯加減である。クラクラしつつも、夏のおかげでサクサクと作品が仕上がっていった。

第二金土デッサン会は約40年の伝統ある会です。今回は設立当初を知る会員の方に思い出を書いて頂きました。

最近の第二金土デッサン会について

裸婦の固定のポーズ、コスチューム、裸婦のクロッキーのデッサン会を、生涯学習センター『けやき』の美術工芸室で行っています。昨年度は、月に約3回のペースで、合わせて45回開催しました。現在の会員は42名で、各回のデッサン会には、10～15名程度が参加しています。毎年9月下旬にはギャラリー新九郎をお借りして、会員の作品を展示し日頃の成果を発表し、会員相互の親睦を図る会員展を行っています。 横田逸郎

長興山での彫塑やデッサンでは物足りず裸婦のデッサン会を催す企画を師三綱と計画した。井上画材店に宣伝の為のポスターの張り紙や、呼び込みの受付を依頼した。催しは毎月第二の金土とした。昨今のメンバーは当初の方と大分変わった様だが展示会の参加者を見ると五十人ソコソコとなるらしい。当初は豊島さんのアトリエや小生のアトリエ、勤労会館等場所を探しながら現在は市の中央公民館(生涯学習センターけやき)に定着したが、会の規約や経費の予算書の提出を求められ加藤、安藤、里見さん等にお願いして私が会務責任者として美術工芸室に定着した。

西相美術が裸婦のデッサン会をやめて久しい今、このデッサン会こそ何時までも絵を描きたい人達の勉強の土壌の一つとして続けて欲しいものだ。頸椎の手術後夜間の運転、特にバックが不得意になって、会務のお助けがママならない。会務を維持していただいている役員の方々に感謝を呈したい。『平成十年頃上梓した冊子「師井上三綱と私」(勉強会の思い出、第二金土デッサン会)より』 日下部良平

残念だったこと

昭和40年代の終り頃だったと思う。まだ第二金土デッサン会という名が付いてなかった頃のこと、会場があっちへ行ったりこっちへ行ったりしていた。

その夜の会場は市立病院の北西徒歩5分程の所にあった労働福祉会館の一室だった。小田原で神格化されていた井上三綱先生がデッサン会に見えたのである。私は先生がデッサンする所を見る良い機会だと思ひ、先生の斜め後ろに場所をとった。

先生はポーズが始まってもなかなか描き始めない。ちょっと描いたかと思うと休んでしまう。どうもおかしいと思ひ先生を見ると顔面蒼白だった。そしてついに描くのをやめてしまわれた。さあたいへん、先生の弟子たちが寄ってきて先生の身を案じた。そして弟子の一人土田俊一郎さんが車で先生をご自宅に送り届けた。それで私は、先生がデッサンするところをあまり見ることができずじまいになってしまった。至極残念だった。 日野顯秀

“裸婦デッサン会へどうぞ・・“今は閉店となった いのうえ画材店で毛筆書きのポスターを目にしたのが出会いでした。昭和48年頃でしたでしょうか。小田原へ来て何も知らなかった私にとって新鮮でした。さっそく参加しました。そのデッサン会は、栢山の豊島シズ枝さんのアトリエ、出来たばかりの広いアトリエで開かれていました。

徳沢隆枝さんや日下部良平さんらがいつもみえていて、時々井上三綱さんが来てはピンポンしたり、デッサンをしたりしていました。そこで聞いた三綱さんのお話は今でも鮮明に覚えています。そのうちに会の名前を決めようということになり、いろいろと考えた末に第二金土曜日に行っていたので、そのまま「第二金土デッサン会」と決まりました。

その後、会場をいくつか移動し今の中央公民館(けやき)に落ち着きました。事務局をしながら、夢中でデッサンをしていました。今でもデッサンをしている時は夢中です。 加藤恭夫

20分ポーズ

6時半を過ぎたのに、モデルさんが来ない。新幹線に乗りおくれたのかしら、急病にでも…といかようにも思ひはめぐる。

5分、10分。むだに時間は過ぎてゆく。そんなあ私がモデルを、ヤラザールメー…はだかにはならないよ。こんな具合はどうかかなとポーズを取ってみる。着衣のまま。上体を静かにしんなりと左に顔は横に、そして少し後に…悲しげに。…ここからは諸君の想像をはたらかせて。ポーズはとったものの二十分は随分つらかった。モデルさんは、この辛さを耐えているんだネ…。このあとのことは忘れてしまった何しろ四十年も昔のことなので…。むづかしいけど感情がわき出て来た。

顔はペチャンコでだめだったが、みんな一様に画き良かった。とても良い感じ、と好評。大成功なんだ。ねエもう一度… 飛んでもハッパン。 豊島シズ枝

デッサン会に行き始めたのは昭和50年(1975)頃からであつたらうか。その頃は中央公民館(生涯学習センターけやき)で夜やっていて、勤務が終わるとバスに乗って行った。デッサンは大好きで家でも家族をいつも描いていた。楽しくて3～4年は通つただろう。当時は日下部良平さん、加藤恭夫さん、里見敏郎さん、清原太郎さん、伊藤トシハルさん、坂田計雄さん、古澤進さん、日野顯秀さん等がいた。その後離れてしまつたが、新九郎でギャラリーに関わるようになり、また皆さんとお付き合いして頂くようになった。第二金土デッサン会は、デッサンの基礎を作ってくれたように思う。 木下泰徳

8月のこと

真鶴まちな一れに妻と 行った。日を間違え開催日前日であつたが、野外なら展示してあるだろうと、ウォーキングのつもりでぶらぶら歩きだした。港を見下ろす眺めのよいレストランに入り、ビールでのどをうるおしながら回るコースを確かめる。再び歩き始めると駐車場にカラフルなツリーの様なヒモの作品が置かれている。バックには青い海。違和感なく景色とマッチしている。さらに真鶴半島の先端に向かう。眺めの良い場所をカメラに収めながら歩く。途中ポイントマークのある場所は、どうやらイベント会場のような。中川一政美術館に着きゆっくり鑑賞する。90歳 近くになって百号の箱根駒が岳を現場で描く。すごいものだ。帰りコースは海岸の方に降りる。潮の匂いが鼻をくすぐる。磯料理の店が並ぶ海岸通も魅力的だ。港につくと「真鶴の月」という作品が、夜のライトアップに備え準備中である。作業中のスタッフの方に聞くと、瀬戸内芸術祭にも参加している作家だった。岸 壁の方にもありますよと示す先に、黄色い球が空中に輪になって浮かび、港の風景に彩りを添えている。本部に向かう。折よく総合ディレクターの平井氏と副実 行委員長の田口氏がいた。平井氏は生まれも育ちも真鶴。和光大学で経営学を教える、真鶴をこよなく愛する人だ。今回の企画は行政の支援を受けず、民間のパワーで実現したというから驚いた。二人のディレクターとNPO法人1000年の森プロジェクトが共催で推進力となり、企業や学校、地元の方々の支援を受けての開催となった。自分で会場を探し、自分で売る、従来とは違うタイプの作家 などにまちな一れの趣旨を理解してもらい、参加してもらっているという。

真鶴半島は、海あり山あり、潮の香りと魅力ある磯料理、こんな中を点在するアートを見ながらぶらぶら歩いて回れるコンパクトさが魅力だ。来年度の開催が楽しみな企画だ。㊦

絵てがみ折々 ー小田原の暮らしの中でー



野地 三恵

毎月絵てがみ教室に行く平塚の豊田公民館の庭に栢の木がある。新緑の頃には大きな葉っぱが窓から見える。日に透けた葉は美しく、まわりの田んぼの上を吹いてくる風にゆらゆらと揺れる。涼しい風に吹かれながら、絵てがみを描くのは至福のひとときだ。

八月末になると、その木は果皮に包まれた栗のような実をつける。それは栗より平たくて色が濃く、つやつやとしてかわいい。絵に描いたり、部屋の飾りにしたりして、見ていても飽きることがない。ボタンにすると拾っている人もいた。

今度は小田原で栢の実を拾ってみたい。上府中公園、辻村植物公園あたりにあるのではないかと探してみようと思ひている。